

（伝）李成「喬松平遠図」（澄懷堂美術館）について—その唐宋山水画史における位置—

竹浪遠（黒川古文化研究所）

本発表では、五代～北宋初期の華北山水畫の大家である李成（919～967）の伝称をもつ「喬松平遠図」（澄懷堂美術館）について、図様や描法から李成系山水畫としての歴史的な位置づけを明らかにするとともに、李成が唐宋山水畫の変革期に果たした意義についても考察を加えたい。

始めに、調査によって得られた画絹や保存状態についての情報を報告し、研究の基礎とする。本図には南宋院体画や明以降の整齊な画絹とは異なる太く質朴な絹が用いられている。経年による劣化のため補絹・補筆が散見され、切り詰めなどによって図様の改変された部分も認められる。画中には元以前の鑑蔵印はないが、これらの保存状態は古画としての伝存の長さを物質面から保証するものである。

考察において注目したいのは、描写の中心である双松と平遠である。このうち双松については先学の指摘もあるように唐代に流行した樹石画の伝統を引いている。ただ一方で、松葉には唐代以来の笠状の葉叢の表現ではなく、細線を放射状に引く新しい描法が取られている。この描法が李成画の特徴であったことは画史類の記述から確認できる。発表では五代から宋前期の参考作例を用いて、李成の松葉の描法の発生過程を追い、そのような表現が選択された理由についても、当時の絵画動向との関係から説明する。

唐代樹石画からの影響は、松と遠景の山水を組み合わせた画面構成にも指摘できるが、それが李成の故郷である營丘（山東省青州）の地理特徴を反映させることによって、新たな山水表現を獲得していることを、現地調査の結果を踏まえて説明する。その上で、平遠表現への構図上の緻密な配慮について分析する。前景の双松と左右から迫り出す岩によって視線を限定することにより、背後の平遠へと鑑賞者の視線を引き付け、遠景と近景を結ぶ水流なども効果的に用いることで、印象的な画面空間が形成されている。本図は土坡などに写し崩れと考えられる箇所が散見されることから、従来も指摘されているように模本と考えられるが、このような遠表現に対する強い関心は、元代李郭派などの後世の作例とは一線を画するものであり、大観的な空間表現を高度に追求した北宋山水畫の達成を伝えるものと評価できる。

「遠」は六朝時代の知識人たちに日常を離れた理想的心境を示す語として好まれて以来、文人たちの精神的・美的価値の一つとなってきた。五代という乱世を経て科挙による文人士大夫が政治の中枢を担うようになる北宋にあって、山水畫における「遠」空間への意識も高揚をみせ、それが李成の平遠山水畫風の成立・流行の背景となったと考えられる。

本図には、水流、岩の形態、皴法などに唐～五代の表現を受け継ぐ古様な点もある一方で、北宋後期の郭熙の皴法の影響が見られ、細部にも郭熙「早春図」（台北故宮博物院）への親近性が認められる。従って、郭熙以降の模本と考えられるが、現存するものとしては、唐宋山水畫の変革点に位置する李成の山水畫風をもっとも良く反映し、北宋後期の李成派の造形を伝える最重要の作品として位置づけられる。